

## 【研究ノート】

## 教職課程における学生の授業力向上と模擬授業

大 町 健

## はじめに

教員に求められる資質能力のうち、最も重視されるものは「授業力」と言われている。2012年の全国都道府県教育長協議会（第3部研究報告）においても、「子どもたちの学力向上に向けて、教員に求める資質能力のうち最も重視しているのは授業力である」と報告されている。さらに学生の授業力育成において重要な役割を果たしているのが、模擬授業であるとされている（柘植良雄2014）。

私も社会科教育法・地理歴史科教育法を二十年以上前に担当した当初から、学生に模擬授業を課してきた。中高の教員として教育実習生を担当した経験から、学生に授業を担当する力をつけるためには、実際に授業をさせてみるのが大切だと考えていたからである。

ただ小松伸之（2016）は、学生の模擬授業には、①教科書の伝達に終始する、②明確なヤマ場のない授業になりやすい、③生徒との応答が不十分になりやすいという傾向が見られると指摘している。

私の授業においてもそのような傾向は見られるが、一方においてそうした傾向に陥らない学生の模擬授業もみられる。学生が模擬授業の問題点を克服し授業力を向上させるにあたって、何が重要なかを論じることを本稿の課題としたい。

## 1 模擬授業の位置

学生の模擬授業は、自分自身は実際に模擬授業を担当しなくとも、少なくとも、児童役割と観察役割の二つを経験することができ、成果が見られるという議論もある（木下百合子2010）。その第1は、理論学習だけではわかりにくい授業の実際について学ぶことができることであるとする。授業を実際に行ってみることによって、授業は授業案どおりにはいかないこと、いかないからこそ授業案をよく考えなければならないこと、授業では、授業者のコミュニケーションスタイルが理論的に考えている以上に影響をもつこと、なども経験できるし、観察してわかるというのである。第2に模擬授業の観察は、正規の教員が行った授業の観察あるいはビデオ観察とは異なった成果が見られる。正規の教員が行った授業については、そ

れが模範として受け取られ、率直な意見がいいにくいこと、またうまくて当然だという意識が働き、見習うには距離がありすぎると感じられることなどが挙げられるとする。しかし友人の授業だと、批判もできるし、自分と照らして優れているという点や工夫の余地が考えられ、より意欲がわくといい、協同学習の効果が見られるというのである。

しかし、授業を受ける役割や観察の役割だけで学生の授業力は育成されるのであろうか。授業を実際に行ってみることによって経験できることと、観察してわかることは同じではない。やはり全員が、模擬授業を実際に行う経験が必要であると考えます。

また15分程度の模擬授業ですまされている場合も多いと聞く。しかし15分では、そのなかに導入・展開・まとめという授業の要素を実際の授業のように盛り込むことは不可能だと思われる。教育実習で求められる授業時間を全うできるように50分の模擬授業の実践を求めている例もある(小松伸之 2016)。しかしその例は、授業の受講生が4名であったことによるものであった。50分の模擬授業を課すとすれば、一コマ一人の模擬授業しかできないことになる。そこで私は30分の模擬授業を学生に課すことにしている。模擬授業の振り返りの時間も必要であるからである。

## 2 模擬授業の問題点

学生の模擬授業の問題点を、①教科書の伝達に終始する、②明確なヤマ場のない授業になりやすい、③生徒との応答が不十分になりやすいと指摘した小松伸之(2016)は、その内容を以下のようなものとしている。

授業者がまず学習内容(特に教科書の内容)をきちんと理解することは不可欠だが、自分が勉強した内容をそのまま伝達することに終始しがちということである。「主たる教材」である教科書は、基礎・基本となる。しかし、模擬授業ではただ網羅的に教科書の内容を取り上げるだけでなく、関連する知識・技能の習得や、習得した知識・技能を活用する場面を設けるなど、授業者のこだわりについて示していくことが「自分の授業」につながっていくと考えられる。

明確なヤマ場のない授業になるのは、扱う内容すべてが重要なように感じられてしまい、1時間の授業としてのポイントを見定めることに苦慮していることに起因している。結果としてあれもこれもとりあげなければという思いから平板な授業に陥り、授業者の本来のねらいが現われる「ヤマ場」が不明瞭なものになりやすい。

前の2つが連動して余裕のない授業となり、十分に生徒と向き合うことができない現状を指している。授業者が説明する場面ばかりが目につく授業構成や、発問が十分に練られていないために生徒の思考を促し発言を引き出すことができないケース、あるいは自身の想定か

ら外れる生徒の発言を受け止められないケースが見受けられるとするのである。

教科書の伝達に終始するという点について言えば、模擬授業前の確認で「教科書を使用するけれども、教科書に引きずられないように」ということで合意しているはずなのであるが、実際には、教科書の文脈にはまってしまうことである。「テストに出るから」「ここは大事だから覚えておくように」という表現での要点の押さえ方やアンダーラインの指示が目立ってしまうという指摘もあり（高木聡 2015）、学生の模擬授業に共通する問題点であろう。

これらの学生の模擬授業の問題点を克服するためには、学生に対する指導が必要になると考えられるが、どのような指導が必要であろうか。また学生はその問題点をどのように克服するのであるだろうか。

### 3 模擬授業の指導

飯島広美・岡田珠恵（2017）は、「授業力」を「授業をデザインする力」と「授業を展開する力」の2つに分けて考えている。その上で、「授業をデザインする力」を①目標を明確にする力、②学習を評価する力、③授業の作戦を練る力の要素に分けて考える。授業目標を明確にすることが授業力の前提であり、それを基準として授業中に生徒の到達点を評価することによって生徒を指導することになる。さらにそのためには、授業の「導入」・「展開」・「まとめ」のそれぞれの場面で授業の作戦を練らなければならない。こうした「授業をデザインする力」を裏打ちするものが授業内容を理解する「教材研究」である。「授業を展開する力」は、①「生徒と問答する力」（コミュニケーション力）、②「生徒の意見や考えを授業に生かす力」（表現力）、③「授業を修正、整理して生徒に目標に向かわせる力」の三つの要素を総合した力であるとする。

「授業をデザインする力」とは学習指導案を作成する力であるが、そのためには、授業をする目的、科目の目標が明確になっていなければならない。そこで、模擬授業を行う三年次の社会科教育法、地理歴史科教育法の前提として、二年次の社会科・地理歴史科教育法の授業で、戦後の学習指導要領の歴史を振り返り、社会科や地理歴史科の学力についての認識をつくっていくようにしている。学力については、学んだ力、すなわち社会についての知識・理解という考え方と、学ぶ力、社会について考える力の二つの考え方があり、両方が授業のなかで追求されなければならないことを理解できるようにする。その上で、私自身が中学社会科、高校地歴科の授業をやってみせて、どのような教材研究と授業研究をおこなって、学習指導案を作成するのかを示すことにしている。

二年次の段階で学習指導案を作成するのであるが、やはり本格的には三年次の社会科教育法及び地理歴史科教育法での模擬授業のために指導案を作成しないと本当の意味では作成で

きるようにはならない。当初は学生に自主的に模擬授業をさせてそれを指導する形をとっていたのであるが、それでは授業する力が一向についてこなかった。そこで事前指導に力を入れることにした。

模擬授業指導の内容は次の通りである。模擬授業の課題の選定について、課題を教師が設定することもあるが、私は学生に選ばせている。ゼミで学んだ課題等、自分がより学んでいるものを選ぶように指導している。その理由の一つは、より理解している課題を選ぶことで学生の学力不足をカバーできると考えている。また学科の専門の先生に指導をお願いしやすい。教育実習での授業範囲が分かっている場合はそれを選ぶことも勧めている。学生のモチベーションが高くなるのと、教育実習の準備にもなるからである。

そして、模擬授業の三週間前に、教材研究をして学習指導案を提出させている。それから週に3回ずつ、計9回研究室に呼んで指導している。多くの場合、教材研究から指導しなければならない。教材研究の到達目標は、その授業で、生徒が何を分かったことが授業を分かったことになるかを一言で言えるようになること、そしてそれが授業をする側のどのような「なるほど」という納得に基づいているのかを説明できるようにすることである。不十分な場合には、本を指定して読んでまとめて来ること、あるいは専門の先生に相談することを指示する。

教材研究に一週間をかけ、次に改めて指導案作成に入る。最初は教育実習で作成するいわゆる略案をつくらせていたのであるが、実際の模擬授業がうまくいかない学生がかなりいた。そこで教師の発問等も具体的に書く詳案、つまり授業の台本をつくらせるようになったら多くの学生の模擬授業がうまくいくようになった。模擬授業について具体的に検討できるようになったためと考えられる。指導案は、まとめ→展開→導入の順に、授業目標を明確にして、そのことに到達するためには、生徒にどのようなことを考えさせなければならないのか、生徒の考える手立てはどのように提供するのか、その展開のためには、どのようにして生徒に関心をもってもらおうのかという順に作成するように指導している。

模擬授業の一週間前に指導案を作成し、実際に空き教室等を利用して、教職の仲間、サークルの仲間等に生徒役をやらせてもらって練習して、うまくいかなかった点を修正して報告するようにしている。この段階でつくのが、「授業を展開する力」である。

三週間の間にここまでうまくいく学生ばかりではない。躓く学生にはうまくいくように援助するようにしている。教育実習に向けた模擬授業であるので、どのようにしたら授業がうまくいくのか、成功体験をもってもらうことが大切だと考える。ただし、指導案を見ての指導であるのでこちらの指導も限界があり、実際に模擬授業をさせてみるとうまくいっていない場合もある。その場合は時間の許す限り、再度模擬授業をしてもらうようにしている。

以下学生のレポートを通じて学生が模擬授業について、どのような困難に直面しどのように克服していくのか考えていくことにする。

#### 4 教材研究と授業目標

指導案作成の前提は教材研究であるが、困難を感じる学生は多い。ある学生は、「テーマを決めるのには時間を要さなかったのであるが、教材研究を進めていく中で、それは想像以上に苦勞することが多く後悔した。一点は、元々の知識が乏しく、甘い考えでテーマを選らんだため調べることが多く、時系列の流れの中で、教えるところの前後も深く調べなければならず、文献を読むのにも苦勞した。二点目は日本史としてやるのに世界史分野のことも多く学ばなければならず、教えることにも工夫が必要で悩むことがたくさんあった。(学生のレポートについては、文体をである調に統一するなど加工している)」と述べている。教材研究が大変であること、時間をかけなければならないことを知ること、教育実習には事前の準備が必要であることを十分自覚してもらうことも模擬授業の狙いの一つである。

一方で、江戸初期外交についてとりあげた学生は、「教材研究のなかで、前提となる世界認識が日本・唐・天竺の三国世界観から、ヨーロッパ人の登場によって、地球的世界観に変わっていったことにあることに納得し、授業目標とした。東京駅の八重洲口の写真を見せ、これが江戸初期の幕府の外交顧問のヤン・ヨーステンの屋敷に由来することをそのことを導入とした。それを授業の展開で、世界認識の変化でウイリアム・アダムスやヤン・ヨーステンなどのヨーロッパ人を外交顧問に雇ったことにつなげていった。」と述べており、教材研究の成果が授業の展開を明確にしたと考えられる。生徒役の感想にも、「八重洲がまさかの外国人から来ていたんだという驚きがよかった。驚きがあると授業が楽しみになるので、生徒をうまく引きつけられていたと思う」とあった。

また、国会についてとりあげた学生は、『「国会というものは何なのか』『どうして日本は二院制という制度で議会在行われ、それはどういうものなのか』ということを生徒に考えさせ、説明と暗記の授業にならないようにと考えた。そのとき一院制が世界で多いという自分自身の驚きを取り上げることで、授業に意外性を取り入れ、授業に興味をもってもらえるようにした。」と述べている。

このように教材研究が模擬授業の成否を握っているといっても良いのであるが、教材研究だけではすまない問題もある。教材研究をそのまま授業に生かせない、授業の受け手、生徒の問題である。とりわけ中学の授業の場合である。模擬授業の生徒役は、大学生であるので、中学の授業にならない場合も少なくなかった。そこで、中学の授業の場合は、中学の教科書を使って授業をするようにと、枠をはめている。

キリスト教伝来をとりあげた学生は、「教材研究のなかで授業目標を、一つ目は、ザビエルは、宗教改革の巻き返しを図るために日本にやってきたこと、二つ目は、キリスト教は戦国大名と結びついたことで急速に布教されたこと、そして三つ目は、戦国大名は支配を強める

ためにキリスト教を利用したことにおいた。模擬授業の反省として、戦国大名がカトリックを受け入れたのはなぜかという理由の一つに支配を強めるためと説明したが、生徒の反応が良くなかった。(分からなかったという感想)。恐らくカトリックの特徴の説明が不十分であったからだと思うので、その点を補強していきたい。」とした。しかし、高校生であれば、キリシタン大名が家臣や領民をキリスト教徒に改宗させたという事実は、史料集等に出ているので、そこからなぜ改宗させたのかということ、ヨーロッパにおける領主とキリスト教の役割からそのことを考えさせることができる。しかし、中学でもそのことを教えることもできるが、それでは高校の授業になってしまう。授業目標の設定自体を考え直す必要があったと指導した。

また、江戸幕府の成立についてとりあげた学生は、「『江戸幕府がなぜ約250年間続いたのか』を授業目標に授業を作っていくことに決め、そのために、徳川家康よりも前に全国統一をした豊臣秀吉と比較して、徳川家康がより強い権力を持っていたことを説明して、生徒に理解させ、授業目標に到達できるようにしようと考えた。家康が関ヶ原の戦いに勝利して征夷大将軍になって幕府を開いたのに対して、秀吉は天皇と結びついて関白となり、天皇の権威を利用して天下統一をしたと説明した。教科書で、豊臣政権と江戸幕府の直轄地の大きさの違いから江戸幕府の方が力が強かったことや、秀吉が関白になってから天下を統一したのに対して家康は関ヶ原に勝って大名を統一してから将軍になったことの違いは理解されたが、なぜ関ヶ原の戦いが重要だったかは、生徒が納得しなかった。」という。高校であれば、秀吉が小牧長久手の戦いで家康に勝利できなかったことで、それまでの武力統一路線から政治的統一路線に転換し、関白となって天皇の「惣無事令」によって天下統一を行ったこと、豊臣政権においては秀吉と肩を並べた戦国大名が五大老となって政権の中樞を担ったのに対して、江戸幕府では徳川と肩を並べた大名は外様と呼ばれて、政権から排除された。外様とされるか否かは、関ヶ原の戦い以前に徳川家に従ったか否かにあるかを示すことができるが、中学ではそれらの事実が教科書には出てこない。ここでも指導目標の再検討が必要だったのである。

## 5 事前練習と授業展開

教材研究に基づいて学習指導案を作成するのであるが、学生の作成してきた指導案は、自分の思考過程をそのまま授業展開にしてしまうことが多い。それでは聞き手(生徒)には分からないので、生徒の思考過程を考えて授業展開を組み立てるように指導するのであるが、なかなか実感がわからない。その時に必要なのは、実際に授業をやることである。模擬授業の前に2回以上の練習をして、実際に発問に対する答えがでるか聞き手が分かるか確認

することを要求している。また、本番の模擬授業では緊張して授業内容を忘れてしまうことがあるので、またメモを見ずに生徒を見て授業をするためにも、必ず事前練習をして授業内容を頭の中に入れておくようにと指導している。

本人があまり練習をしなかったという学生は、「教えるべきポイントが多くまとめが上手にまとまらず。膨大な板書をこなしてなんとか筋を追うことが精一杯になった。リアクションペーパーで、授業がわかりにくい、また発問も少なく生徒が答えるための手立てが用意されていないことも指摘された。二度目、板書がとにかく多かったので、授業プリントを作成することにした。それを見ながら進めていくことで授業の流れがスムーズに進むと考えた。生徒に考えさせるところには※をつけ、余白に書き込ませるように工夫した。余白スペースを広くとり、生徒が自分の言葉で文章にすることで理解が深まると同時に、教材研究で培った知識を口答で伝える際に書き込んでいけると考えた。実際には板書に時間がかからなくなったとはいえ、書き込むことがあり、その内容を板書してから説明するので時間が足りなくなってしまった。」と述べている。事前の確認不足である。変更後も、練習して確認しておくように指導しているのであるが、教材研究や指導案作成に時間が取られて、事前の練習に時間がとれなくなってしまったのである。

また、ある学生は、「指導案が完成しいざ授業を試みようとしたときに、予想していなかった問題が出てきて困惑することが多かった。その第一が時間に収まらないことがわかったことである。内容が減らせないので、板書のスピードを上げる練習をした。模擬授業では時間に収まった。生徒からはスピード感があって良かったという感想とともに、もう少し時間をとって欲しかったという感想もあり、人によってノートをとる速さが違うということに気がついた。中学生ならなおさらである。」としている。こうした点は、授業のなかで繰り返し指摘しているのであるが、学生自身が模擬授業をするなかで初めて実感できるのである。

またある学生は、『「板書を省いている」、この指摘には少々私は驚いた。自分では理解した上で分かりやすく説明しているつもりだったが、生徒（クラスメート）から見ると板書の内容が連続せず、後で見返したときにははっきりと内容を思い出せない（理解できない）と指摘された。』と述べている。授業するときにもこれも陥りやすい錯覚であるが、授業をする側は、口答で説明したことで満足し授業が連続しているようにみえても、生徒が口答で話したことをノートしないかぎり授業が連続しないこと、話したことは消えるので必要と思うことは必ず板書することを指導しているのであるが、やはりこれも実際に授業を試みないと学生には定着しないのである。

またある学生は、「今回の模擬授業をするにあたって練習を2回した。一回目の練習は模擬授業の一週間前で、生徒役を同じ教職を履修している友人にお願いし、一対一での練習となった。その練習が私にとって授業というものを誰かに初めてしたものなので、とても緊張して、

指導案どおりの授業ができなかった。また自分ではこの位で生徒に分かるだろうと考えていたことが、意外ともう一段踏まないと理解しづらいというアドバイスもらった。二度目は自分が所属している部活の人十人くらいを相手に模擬授業本番の三日前に行った。一回目は、同じ教職の人なので、発問に何かしら自分が答えて欲しいことを答えてくれたが、二回目は、発問しても『分かりません』という答えや、想定しなかった答えが返ってくるなどした。もっと練習をしておくべきであった。模擬授業本番ではとても緊張し、話している言葉が震えた。」と感想を書いている。模擬授業は、教職課程履修学生を相手に授業をすることが多い。生徒役も授業する側の苦勞が分かるので、何とかついて来てくれる。そこでこの学生のように、教職課程以外の学生相手に事前練習をするように勧めている。そのなかで気づくことも多いのである。模擬授業の事前練習はそのような意味でも重要だと考えている。

一方で、「友人に協力してもらい、模擬授業の練習を三回、黒板は使わずにやり取りだけの練習を五回程度行いました。そのため、授業の流れがしっかりと頭に入っていて本番では指導案を見続けているようなことはありませんでした。」というように、何度も練習を繰り返す、達成感を得ることのできた学生も少なくない。

さらに鉄砲伝来を取り上げた学生は、「戦い方の変化 鎌倉時代の蒙古襲来図からわかる一騎打ちから、室町時代の応仁の乱の図からわかる集団戦法に変化し、さらに戦国大名の領国の武士をまとめて強力な軍隊を作ったという戦い方の変化という展開Aと、長篠の戦いを長篠合戦屏風から織田信長（鉄砲隊）と武田勝頼（騎馬軍団）の戦い方を検討し、武田軍のメリットは一気に攻め込めること、織田軍のメリットは遠くから攻撃できる、デメリットは、導入に使った火縄銃の撃ち方の動画からわかる、撃つのに時間がかかることにあった。これを三段撃ちや教科書の注にあった柵・堀で馬を止めることで集団戦法による鉄砲の有効性が示されるという展開Bのどちらを先に教えるかを悩んだ。友達に何度も授業を見せてどちらの方が良いか試行錯誤しながら作成した。今まで教える順番というものをそこまで気にしていなかったが、この授業で初めて耳にする歴史上人物、戦争名がでてくるので、その知らないことを教えるということはどれだけ生徒の理解を簡単にするかが大切だと思った。教える順番を考えずに物事をただつらつらと教えるというだけの授業では生徒の関心は薄れ、その分野に苦手意識を植え付けてしまうものだと思った。一度苦手意識をもってしまうとそれを克服するのは困難なため、丁寧に筋の通った授業を行うことが大切と感じた。私の模擬授業練習につきあってくれた友人は、世界史専攻で日本史に苦手意識をもっていた。展開Aと展開Bの順番をそのまま逆にしたものの二つの授業を受けてもらった。順番を変えただけですごく分かりやすくなったと言っていた。もし中学生の時にこういった教え方をしてくれる先生にあたっていたら世界史ではなく日本史の方が好きになっていたかもという言葉も言ってもらい、順番の大切さを実感した。」と、事前練習を繰り返すことで授業の展開の



重要性に気づき、授業力を向上させていったのである。

## 6 導入の工夫

模擬授業の導入を工夫するようにと指導している。ネットや本から画像を手に入れ、パソコンでパネルをつくることは、基本的な技術として教えてある。江戸の初期外交の授業のように、八重洲口のパネルを示すことで興味を引く場合もある、しかし歴史上の人物の絵を見せても生徒はそれが誰か分からないし、それではインパクトに欠けるときがある。

世界の気候をとりあげた学生は、導入について、「地理の教科書や資料集を見ていると世界の文化として服について、紹介しているページがあった。中学生のころこのようなページを授業が面白くない時に見ていたことを思い出した。だから関連づけられないかと考えた。地域によって気温が違うとともに服装が異なってくる。さらに中学生が興味を持ちそうなことにしたかった。そのような経緯で「世界動物ツアー」に参加する前提で動物の住む地域の気温を想像してもらい、どの様な服装で行けば良いかと生徒と対話しながら導入をやることにした。」と自分が興味をもてることから入っていくことも大切であろう。

動画を使うことも多くなっている。鉄砲伝来の授業で、火縄銃の撃ち方の動画で始めたことは先ほど触れたが、日本の気象の授業では、冬の日本海からもうもうと水蒸気が立ち上っている動画は迫力もあり生徒の興味を引くものであった。

実物を使う導入では、アメリカの授業をするのに、ハンバーガーとミックスサラダを持ってきた学生がいた。これがアメリカだというのだ。ハンバーガーは、牛肉と小麦というアメリカの特産品でできているアメリカの国民食であり、ドイツのハンブルグに由来していて移民の国であることの象徴だという。さらに昔は、それらの移民が一つの国民に融合することという「人種のるつぼ」、ミックスジュースに例えられたが、今では「人種のサラダボール」といわれ、一つ一つの材料がその原型を保ちながら混ざっているミックスサラダだと授業内容に結びつけていった。導入に使う実物は、土器、香辛料各種、コットンボール、お札、小判、金印、など私ができる限り準備をしているが、学生自身が準備工夫をした方が、やはり授業は盛り上がる。

学生が導入に困る授業は主題が抽象的な授業である。たとえば鎌倉幕府の成立であるが、その授業を鎌倉に行ったことで乗り切った学生もいる。その学生は「授業研究をしていく中で最も大変だったのは導入のやり方についてだった。導入は授業の始めに生徒の興味や関心をひかせるという目的で行うものであって、いろいろなやり方がある。私より前に模擬授業を発表した人たちは映像を見せたり、パネルを作って生徒に見せたりして、興味や関心を引かせていた。私がやれることとしては源頼朝の顔の写真をパネルにして見せることくらいし

かなくて、考えても思いつかなくて、煮詰まってしまった。だから何かないかと、実際に鎌倉に行ってみた。なにか鎌倉で歴史的なお土産だったり、鎌倉に由来のある実物を見つけてこようと考えたのだった。そして鎌倉の大仏の中に入ることができる聞き、実際に中に入って見て、面白かったので導入に使えると思った。パネルを作り、クイズ形式でやった方が面白いと思い、やってみて、みんなからいい評価をもらった。」と述べている。

現地に行つてということでは、地方都市のことを取り上げるのに実際にシャッター街の写真を撮りに行った学生がいた。また、徳川綱吉を取り上げるのに、犬公方で犬屋敷のあった中野区の区役所にそれを記念する犬の銅像があることを知り、写真をとりにいった学生もいた。ネットで写真を手に入れることもできるのだが、現地に行くとその周辺の情報が入っていくので、授業に厚みが増してくる。

## むすび

ここまで学生の授業力を育成するためには、実際に学生が授業をおこなう模擬授業が大きな意味をもつことを論じてきた。ただそれだけではなく、今回初めて模擬授業をしてみて教師の大変さを体験できたという学生が多かった。「今までは生徒という立場で『あの先生は教えるのが下手くそだ』と先生のことを小ばかにしていた部分があったが、自分が模擬授業をする立場になり、そんな風に思っていた先生方に謝りたい気持ちでいっぱいになった。」と、教師の仕事の大変さに思っていた学生がいる。教職の学生のすべてが教師になるわけではない。たとえ教師にならなかったとしても、教師や学校の仕事に理解をもち、大変さに共感をもてる社会人をできる限り増やしたいと考えている。実際に学校現場を経験する教育実習は重要な意味をもっていると考えますが、模擬授業は、学生の教師の仕事に共感するという視点を準備する役割を果たすのではないであろうか。

さらに、「社会科に苦手意識をもっている多くの生徒たちは社会科を暗記科目だと思っている。そしてそのほとんどの生徒たちが暗記は嫌いだと言う。私は、暗記が苦手だからといって社会科が生徒から毛嫌いされている状態を何とかしたいと考えた。」という学生や、「指導案作成から模擬授業まで行ってみて教師という仕事は大変だと改めて思った。特に常に授業のネタのためにアンテナを張って居る必要があるということは、生徒の興味を引くためにも、また授業の質の向上のためにも大切なことだと感じた。」と、教師の仕事への意欲を高める効果ももっているのである。

(成蹊大学経済学部教授)

## 参考文献

- 飯島広美・岡田珠恵（2017）「教員養成課程における「授業力」の形成と向上のための方策」『湘南工科大学紀要』第51巻第1号，pp.117～126
- 木下百合子（2010）「社会科教育法における模擬授業」『教科教育学論集』9，大阪教育大学教科教育学研究会 pp.11～12
- 小松伸之（2016）「社会科教育法における世界遺産の教材化と模擬授業の実践」『東京成徳大学研究紀要一人文学部・応用心理学部一』第23号，p.195
- 高木聡（2015）「授業実践の「見立て」直しの試み」『関西教育学会年報』京都大学大学院教育学研究科第39号，p.89
- 柘植良雄（2014）「学生の授業力向上に関する一考察」『岐阜聖徳学園大学教育実践科学研究センター紀要』14，p.127